



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.103
2012.4.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

24

「戸沢充則さんと歩く 調査する」

私の考古学は同世代の学友に支えられて育った。考古学のイロハは今村賢司さん、深さ・楽しさは戸沢さん、人との結びつきは塚田光さん、豊かな発想は桐原健さん、心の豊かさは樋口昇一さん、中でも戸沢さんとの10代後半の5年間は私に強い影響なった。いつも目標のライバルであり、あって話せば一歩以上先に行っていて悔しかった。

出会いは藤森栄一先生宅であったと思う。親しくなったのは昭和24年(1979)12月1日 塩尻市での中南信学生考古学会準備会と思う。戸沢さんは諏訪清稜高校3年、私は飯田高校2年、このとき松本県ヶ丘高校3年桐原健さんも出席していた。翌年1月28日戸沢さんは下伊那の私の実家に泊りに来たのが初めて、毎年2~3回 来れば数日泊って下伊那の各地を歩き、小さな発掘もした。立野遺跡と北原遺跡の発掘が記憶に強い。立野遺跡の調査では諏訪から3人、東京から2人の5人が我が家に泊って、戸沢さんが岡谷市下り林遺跡の経験でロームまで深く掘ればと言ひ、掘り下げたら多数の押型文土器が出土した。これが学界に残る発見となった。今考えると5人も泊っての世話に母はよく接待してくれたと思う。我が家には神田五六先生・大場磐雄先生も泊ってくれた。北原遺跡は表採資料を基に二人で『諏訪考古学』に纏めたが、調査してみたくなり戸沢さんと郷土班の仲間とトレンチを入れた。住居址に当たって弥生中期の壺・甕を検出した。この2遺跡の調査が私の押型文土器・弥生土器の根幹テーマとなった。

諏訪に出かけた時は藤森先生宅か戸沢さん家に泊った。26年曾根湖底遺跡、27年樋沢遺跡・茶臼山遺跡、28年新道遺跡があり、それぞれ特徴ある遺跡で時期・

遺物が違っている。特に茶臼山遺跡が強く印象に残っている。

茶臼山遺跡は松沢亜生さんが工事現場で発見し、藤森先生に連絡、ついで戸沢さんにも。早速駆けつけた戸沢さんは岩宿遺跡とは違った旧石器ということで戸沢さんに電話した。私は戸沢さんからの連絡で共に諏訪に行った。戸沢さんは石器を見て驚喜し杉原先生に連絡した。私・戸沢・松沢の三人は遺跡に上がり残丘をツルで崩した。不思議と石器有る所で崩れ、ローム面に潤んだ黒曜石石器が姿を見せた。藤森研究室では戸沢さんと杉原先生が石器をみてカタカナ語で分類するのを見て藤森先生はよく分からず戸惑って居られた。遺跡調査について両先生の間にやり取りがあり、私達は居づらく戸沢家に逃げた。杉原先生・戸沢さんが東京に帰ってから3人で完掘した。茶臼山遺跡の黒曜石主体の旧石器は学界から注目され、戸沢さんはこの石器群をテーマに卒論を書き、旧石器研究者となった。松沢さんは技法・手順の研究者となり、私は英語が苦手なので旧石器から遠去かった。

高3の時 戸沢さんと下伊那南部阿南地方を歩き新野で宮坂英弑先生の息子昭久さんを訪ねた。ここで戸沢さんがホームシックにかけ諏訪に帰るが、私は足を伸ばし奥三河を歩き夏目一平さん・伊東正松さんを訪ね所蔵遺物を見せてもらった。

大学2年夏 7月4~11日の8日間 静岡・愛知両県の山間部の遺跡に遺物を求めて歩いた。西志賀貝塚の発掘参加に課題を持行こうと、戸沢さんは庄の畑遺跡の浮線網状文土器の西漸を、私は林里遺跡の条痕文土器の淵源を辿っての調査歩きでした。幾つもの遺跡・遺物をみての、所蔵者宅に泊っての考古学談義が懐かしい。この調査がキッカケで私の卒論は条痕文土器となった。

3年冬 戸沢さんの退学騒ぎがありシガレットケースを皆で出し合った金で買って渡した。4年4月大学に行ったら藤森先生・杉原先生の説得があつて戸沢さんがいた。その時から二人の間に見えない心の隔たりが生じた。が 私にとって15~19才の5年間に一番影響を与えたのは戸沢さんだ。感謝あるのみ。



1952.11 茶臼山遺跡発掘



1953.7 静岡県半場遺跡

*巻頭連載は隔月です。次回からは塚本師也先生の新連載が始まります、お楽しみに。

目次

■田舎考古学人回想誌	戸沢充則さんと歩く 調査する	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第96回)	遠部 慎 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第3回)	石井則孝 …2	■考古学者の書棚	『原始社会』	野坂知広 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(第3回)

石井 則孝

《日本考古学協会図書問題に寄せて》

はじめに

今、手元に昭和48年1月20日(1973)現在の協会々員名簿がある。会員数は640名(2012年1月は4000名を超えている)。昭和50年度(1975)の委員を記すと麻生 優・石井則孝・石附喜三男・大井晴男・岡田茂弘・乙益重隆・加藤晋平・神村 透・菊地徹夫・久保哲三・小林三郎・潮見 浩・重松和男・嶋田暁・鈴木公雄・田中琢・田中義昭・都出比呂志・西谷正・早川智明・森浩一の21名となり、在京委員が9名であった。

規約改正で、現在は法人となり、委員と称していたものが理事に変更されている。現在は理事会があると全員集合し、九州からでも北海道からでも全員に交通費が支給されている。しかし、かつては貧乏協会であったので交通費支給など考えられず、全員が手弁当で動いていた。従って遠方の委員は大変なので、在京委員会制度が作られていて、東京・埼玉・千葉・神奈川在住の委員が毎月都内の大学に集まり委員会を開催していた。

1、協会事務所と事務局体制

事務所は、東大の考古学研究室にあり、長い間藤本 強さんがその任に当たっていた。その後、昭和45年(1970)年頃だったか、東大赤門正面にあった赤門ビルの一室を借りて事務所として使用していた。事務局員として、田村晃一さんの教え子渡辺真澄(旧姓長谷川)さんが留守番をしていた。今考えるとゾットするようなビルで、若い女性が良く一人で居られたもんだと反省している。土曜日には、なるべく顔を出すようにしていた。狭い一室で、蔵書など置ける余裕などなかったので、年報を一括して拙宅で預かるため、スバルサンバーで、何回かに分け運んだものだった。500冊くらいはあったであろうか。これが図書問題のスタートである。

その後、会員の一人である目白駅近くのKさん所有のマンションの一室を確か20万円のところ半額にしてもらって10万円だったと思うが委員が集まって会議のできる事務所を設けることが出来た。現在の平井駅前へ引越したのは何時だったか私は知らないが、目白に6・7年いたのではないだろうか。会員の増加に伴い事務局体制の整備を行い、会員の中から事務局長を置くことになりその第1号が古山 学さんであった。このような事情の中で今年3月停年になる事務局員の酒井さんにはどんなに助けられたか会員一同胆に命じて感謝しなければならない。

2、荒れた総会・大会について

協会解体を叫ぶ全共闘の一部学生たちによる騒動が、平安博物館事件、開催できなかった浦和の総会、竹筒の攻防による豊島公会堂における暴力事件(高島忠平さんはメガネを飛ばされ顔を負傷、会場内はバルサンを燃れ、大川 清さんの『この不逞の輩出て行け!!』のドナリ声等々)結局総会は開催できなかった。この年の秋の札幌大会は、関係者全員一生忘れられない騒動として記憶されているだろう。とにもかくにも協会事務局のお金は、会費をもらわないので0円、仕方なく久保哲三さんは自分個人の貯金通帳をもって札幌へ行った。

総会が始まったら灰皿叩きの大騒音、さらに、壇上のマイクを私と学生とが奪い合い、私は会場担当委員であったので、灰皿の方はあきらめマイクだけは死守すべくがんばり、私の方が学生より腕力が強かったので、学生は最後にはあきらめ壇上から離れていった。私はマイクを持ってしゃべり続け、北海道大会の責任者であった千代 肇さんもがんばってくださり、この騒ぎはなんとか午前中で治まった。

午後からの研究発表会は順調に進行し、夜の札幌ビール園での懇親会は、午前中の件があったので出席者全員が喜び、大変な盛り上がりで大ジョッキがどんどんと空となっていった。

当時、本州から北海道へ渡るのには、長時間の列車を乗り継ぎ、青森からは青函連絡船で函館まで渡り、それから又列車に乗り札幌へとめざしたものであった。時間とお金がどのくらいかかったかは忘れたが、会員一人一人色々とう工面して北海道へ駆けつけたのであった。

3、お金と図書の問題

北海道大会後からは、青山学院だったか駒沢大学であったか、春の総会は順調に開催されるようになった。しかし、協会のフトコロは相変わらず貧困で、開催校や手伝いの学生へのお礼が出来ないので、編み出したのが年々高まっていった図書交換会であった。一卓何がしかの金子をいただくことによって、会場費を生み出すことであった。20万円近く集めた記憶が残っている。と同時に、協会へ一冊ずつ寄贈図書もいただくことにした。(これは後に、会場校へも一冊寄付ということで行われている。)これが、年2回の集本体制が出来、蔵書が大量に出来てしまった主な原因である。(会員資格審査でも相当量の本が寄付されている)昭和50年代前半より、自治体組織の埋蔵文化財センターが設立され、日本列島改造の動きに伴って列島全体が発掘ブームとなり、考古学関係にお金が廻るようになり会員数も激増していった。

私が都埋文に勤務していた時、多摩市のパルテノン多摩を会場として春の総会を開催した。この時は都教委から100万円という大金の補助金をもらい余裕をもって開催できたことを記憶している。昭和60年(1985)頃には、考古学にとって社会情勢が良くなり協会財政も解決していったと思われる。

4、市川市博へ協会図書の収納

図書問題に話を戻すが、私が委員時代に、市川市立考古学博物館が完成し、市に出向していた関係から熊野・堀越両氏と相談の上、たまってしまった協会図書を、たまたま一室が空き室になっていたので無償で預かることにした。しかし堀越さんが停年退職になる頃には満杯となってしまい、協会は仕方なく、

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

埼玉の運送業者の倉庫へ預けるようにした。

図書預け料金も年々増加の一途、関係者は何を考えているのか。奈文研・榎考研、帝京大山梨研究所等、協会図書をいただいているところがあった。何故理事会はそうしなかったのか。一時期、協会のA理事は、懸命に空き校舎をはじめ倉庫さがしに走っていた。他の理事に危機感が欠けていたのでは。何時から理事が各種会議への出席者へ旅費を支給するようになったのか？ 会費収入4000万円の内、20%近くが旅費で消えていっている。

レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 96

犬島貝塚 ～ 岡山県岡山市

遠部 慎

岡山県岡山市東区に所在する犬島諸島は、犬島・犬ノ島・地竹ノ子島・沖竹の子島・沖鼓島からなる。私が紹介する犬島貝塚は、地竹ノ子島という無人島に存在する縄文時代早期の貝塚である。

私は縄文時代前半期の研究を行ってきたが、中でも押型文期の貝塚について、多角的に検討を重ねてきた。そうした中で、瀬戸内海の黄島、黒島貝塚などの資料調査を経て、豊島：礼田崎貝塚にたどり着いた。瀬戸内海の縄文時代早期に汽水から鹹水にかわることは古くから知られているが、それが豊島と黄島、黒島では出土した土器、貝類の組成、年代測定結果から明らかに時間差があることが、礼田崎貝塚を中心とした研究成果から明らかになってきた。その後、改めて関連する研究対象として、いくつかのイニシャル「I」のつく遺跡が候補としてあった。その1つが冒頭で述べた犬島貝塚であった。

犬島貝塚は、岡山市西大寺在住の考古ボーイが1970年に発見した。貝塚として、遺跡地図などにも記載されるものの、「名称」はつかないままであった。その後、紆余曲折を経て、ふとした会話の中から、その実在を知ることになった。

黄島貝塚、小島貝塚などは史跡化され、黒島貝塚・礼田崎貝塚などはほぼ調査されつくしており、誰も手を付けたことのない貝塚がこの瀬戸内海に眠っているように、まさに想像もしていなかった。勿論、少しでも可能性のある場所についても、可能な限り踏査していた。その多くは、消滅ないしは別時期の所産であった。それゆえ、たとえ存在するとしても、小規模なもの、というこれまでの調査記録に納得していた自分がいたことは間違いない。

そうした中、貝塚から得られた資料を調査した結果、いわゆる黄島式以前と考えられる資料がまとまっており、貝類が伴うのであれば、少なくとも岡山県最古の貝塚であると考えられた。その現地がどうなっているのか、急ぎ、現地を確認する必要があった。資料調査から1月。発見者や有志を募り、巡検を実施した。その中に犬島関係者もいた。この方の実家で調査のたびにお世話になっている。現地に行き、はじめて貝塚を見た時の感動は忘れられない。崩れ落ちた断面に露出したヤマトシジミの貝層は7m以上あり、その時点で瀬戸内海の汽水性貝塚としては、屈指のレベルであるとわかった。

この貝塚の研究および保護ができれば・・・とは思っていたものの、無人島にいくための「船」「費用」「人」、ありとあら

おわりに

財政問題は重大な問題である。札幌大会の時の会長であった乙益重隆先生は、仲間の委員を称して戦友という言葉を使っていた。今の若い会員には戦友という意味が解らないであろうが、平和ボケこそ大問題である。

東北大震災後、奈文研はすぐに文化財の被害状況の調査に行った。縄文貝塚は全て大丈夫だった。それは何故か？ 縄文人の知恵をこの際学んで欲しいものである。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。



犬島貝塚遠景(地竹ノ子島)

ゆる課題が山積であった。特に、調査にあたっての手続き・準備については多大な困難があった。ただ、地元の財団をはじめとする助成や、マスコミ、多くの方々の支援を受けて、なんとか2011年9月まで5次にわたる調査活動を続けてきた。その結果、いわゆる汽水性貝塚としては縄文時代早期の瀬戸内海でトップクラスの保存状態で、少なくとも岡山県最古の貝塚が、前方後円墳によって覆われていることが明らかになった。

そして、貝塚の存在を2006年秋に知ってから、ほぼ5年を経て、いわゆる発掘調査としての作業は終了し、次の段階へ進む計画であった。その矢先の2012年について貝塚の崩落が始まった。現在、詳細な検討中であるが、約7mにわたって、貝層およびそれを覆う前方後円墳の前方部が失われた。調査終了後、調査者が現地を継続的に訪れることは、感覚的にだか少ないと思う。しかし、私達は調査段階から遺跡の重要性を訴え、公開に努めてきた。そして、調査後も継続的に島に関わっており、その一環でこのような事態が判明し、比較的早急に対応に動いている。

内海離島における遺跡保護の問題はこれまであまり議論されていない。周辺の島々でも、様々な遺跡調査が行われてきているが、振りかえられることは少なく、「振り向けば未来」ではない。少なくともイニシャル「I」の島については、そうやってほしくない、と思う。しかし、この犬島貝塚でさえ、少し前までは名称さえついていなかったことを思えば、予断は許されない。ならば、この貝塚の歩みこそが新たな可能性を見出すことに繋がるように思えてならない。

思えば、調査を継続する間に私は3つの職場を体験している。そのようなこと自体、ありえないことだとは思いますが、なんとか続いている。その経験をさせてくれた貝塚および関係者には感謝している。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは岡嶋隆司さんです。

考古学者の書棚

「原始社会」

角田文衛／弘文堂 アテネ文庫(1955)

野坂 知広

本書は、昭和30年(1955)に刊行された総80頁の文庫本である。たとえ考古学研究者であっても、30代以下の年代の方々には馴染みの薄い一冊であろう。かくいう筆者も、本書を探そうと思って手にしたのではなく、古書店で偶然見つけたのであった。

現在我々は、一般用語としても学術用語としても、「原始」なる表現を使うことはあまりないが、昭和30年代当時は、文明社会に対する原始社会という理解をしていたのであり、未開社会と同義語のように使われていたのである。では、本書でいう原始社会とは何か。むろん、原始社会とは、原始時代の社会であるが、著者は「角田史学」とも呼ばれる独自の史観を確立させた考古学者(歴史学者)であり、本書でも「原始」や「先史」、あるいは「歴史時代」などの用語を痛烈に批判する。ただし、一般読者の利便のために、「致命的欠陥はあるけども、今はしばらく従来の慣習に従い、それを古代史のうちの古い部分と解しておくこととしたい。」と述べ、世界史における人類の誕生(人間の形成)から都邑文化の成立までを概説するのである。なお、著者は歴史を古代・中世・近代に大きく三区分しており、現代をも近代後期として理解する。古代は、始原・古拙・古典時代にさらに三区分され、本書で扱う時代は始原時代と古拙時代である。旧石器時代とか中石器時代とか利器の材料や製作技術によって時代区分をすることはなく、前述したように文字の有無にも大きな意味を見出さない。重要なのは人間の生活様式であり、大きく獲得経済と生産経済に分け、獲得経済の時代を始原時代、生産経済(農耕・牧畜)が始まり、定着していった時代を古拙時代というのである。

本書は、あくまで一般読者のための小さな概説書であり、頁数は極めて限定されたものである。その内容も我々が高校の世界史教科書で習ったものを大きく逸脱することはない。にもかかわらず、筆者がこれを紹介するのは、これほどに透徹された史観によって、しかも簡にして要を得た文章力でもって古代史の基礎を概説してくれる書物が他に見当たらないからである。もちろん、本書は昭和30年(1955)に刊行されたものであり、その内容には当然古さがあるが、物事の本質を一言で説明する文章はいまだ刺激に満ち溢れている。

たとえば、「数十万年に及んだ始原時代において人々が専ら狩猟に従事し、放浪的生活を送ったとはよく説かれるところであるが、これは非常な誤解である。」と述べ、考古学的事実に則れば、積極的狩猟の形跡は見出せないとする。また、獲得経済の文化が極限にまで発展した始原時代後期末葉に

起こった気候変動(自然環境の大きな変化)により、危機に陥った人々が農耕や牧畜を発明したといい、「人間の発展は、この危機の巧みな克服によって始めて可能であったのである。」と述べる。さらには、「歴史の発展のためには、余りにも恵まれた自然環境は有害である。」として、「文化の発展のためには、生活の適度な苦しさが必要であって、現状への不満が発展の基本的な契機となるのである。」と総括する。

これなどは聞き慣れた一般論であるが、一般論を説得力をもって言えることが実は稀有なことなのである。農耕とは単なる植物栽培ではなく、穀草を中心とした植物栽培であり、牧畜とは単なる家畜の飼育ではなく、有蹄類動物の飼育であると言い切った一般概説書がどれほどあるだろうか。

また、本書は常に世界史的視野に貫かれており、日本列島についても、縄文時代を「典型的な、しかしそれはそれなりに発達した停滞的始原文化であった。」と述べ、弥生時代に至ってようやく古拙文化を育成し、世界史の落伍者たるを免れたと結論づけている。

余談ではあるが、著者は「ある文化が始めて検出された遺跡、またはある文化の標準的な遺跡の名をもってその文化を呼ぶのが常である」との世界史の常識に従って、我々にとっては聞き慣れた「縄文時代」の呼称を否定している。旧石器時代(先土器時代)は岩宿時代、縄文時代は大森時代、弥生時代はそのまま、古墳時代～奈良時代は大和時代と呼ぶことを古くから提唱しているのである。もし著者がまだ存命であれば、「縄文遺跡群」を世界遺産に登録しようなどという運動を鼻で嗤ったであろう。

本書の最後には、生産経済の発明が人間に急激な発展をもたらしたと、しかし年代的に見れば最近5000年の文明時代は歴史全体の極小部分に過ぎないことが述べられており、いわゆる原始時代の間に、人間の発展に必要な基本的条件はすべて準備されたとする。近年、基層文化なる用語がよく聞かれるようになったが、本書の文末は、「これすなわち歴史の大局的把握のために、遠古史の研究が特に要望される所以なのである。」と結ばれている。

アルカ通信 No.103

発行日 2012年4月1日
 発行人 角張淳一
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp